生活単元学習を大きく位置づけた教育課程・実践の意義に関する検討（2）
－小学校知的障害特別支援学級における学校生活づくりを通して－

戸来　キイ子※・名古屋　恒彦※※
（2009年９月16日受理）

Kiiko HERAI・Tsunehiko NAGOYA

Research on Practical Outcomes of a Reformed Curriculum Centered on the Unit of Life（２）:
Through School Life-making in a Special Support Class for Children with Intellectual
Disabilities in Elementary School

１　問題と目的

戸来・名古屋（２００９）は、戸来・名古屋（２００６)、戸来（２００７）の成果を踏まえ、小学校知的障害特別支援学級において、モザイク型週日課を改め、生活単元学習を中心にした教育課程編成及び、帯状週日課の作成を行った。その下で展開される生活単元学習で、子ども主体の活動がどのように実現しているか、さらに生活単元学習中心の教育課程の意義を検討した。

授業研究に当たっては、授業者による毎回の授業記録からの手立てと児童の様子の検討、授業研究会を実施し参観者の意見及び授業者の反省の検討、保護者へのアンケート実施とその検討の三つの方法で行った。その結果、授業者による日々の手立ての修正が、子ども主体の活動実現につながっていること、家庭においても単元期間中を通じて、子ども主体の活動が見られていることなどが示唆された。一方、課題としては、授業者による反省として、子ども主体の活動を妨げる状況に対応する道具等の工夫、道具や場の配置の不足も指摘されており、今後の授業改善に課題を残した。

継続的な授業記録、授業研究会、保護者へのアンケートという多面的な検討から上記のことが示された。しかし、これらの成果や課題はいずれも一単元期間にとどまっており、単元そのものを改善し、以降の新たな単元でのさらなる子ども主体の活動が向上していくかは明らかではない。

そこで本研究では、上記先行研究における生活単元学習（以下、「第１次単元」）に続いて同一年度に行われた生活単元学習（以下、「第２次単元」）を第１次単元と同じ方法で授業研究し、第１次単元での成果や課題が授業改善にどのように生かされていたかを検討する。

２　方法

（１）対象学級

公立Ａ小学校に設置された知的障害特別支援学級１学級を対象とする。児童３人（２年生１人、５年生１人、６年生１人)、担任１人である。第１次単元を実施した１学期より、生活単元学習を中心に位置づけた帯状週日課表で生活している（表１)。

＊岩手県立盛岡みたけ支援学校、＊＊岩手大学教育学部特別支援教育科

（２）対象授業

第１次単元での成果と課題を踏まえて実践した第２次単元の概要は、以下である。

研究対象年度９月上旬から10月上旬にかけて実施した生活単元単元「学校でキャンプ」（単元日数16日間）を対象授業とする。本単元は、第１次単元同様に、毎日校庭にある東屋を活動場所とし、軽量ブロックで作ったかまどで火をおこし、カップケーキ及びきりたんぽ、だまこなべ（「だまこ」はきりたんぽを団子にしたもの）を作っては食べる生活を繰り返すものである。単元最終日は、第１次単元のデイキャンプをバージョンアップし、学校で一泊するキャンプを実施し、締めくくる。

３人の児童の様子、ねがい、手立ては、表２に示すとおりである（児童名はすべて仮名。以下同じ）。

（３）授業研究の方法

対象授業に対して、以下の三つの方法で授業研究を行う。尚、筆者の役割は、戸来は授業計画者及び授業者、名古屋は授業計画協力者であった。

①授業者による毎回の授業記録

授業者により、３人の児童一人ひとり及び授業全体の活動に対して、毎回の授業記録（主な活動、活動の様子、支援の手立て、手立ての反省を記録）をとる。

②授業研究会の実施

単元後半に授業研究会を実施し、対象校内の教師による自由参観を行う。そして本時授業について、参観者へのアンケート、授業者自身の反省を記録として整理する。

ｉ　参観者へのアンケート

参観者には児童３人の様子、ねがい、手立てを示し、アンケート記入の協力を求める。アンケート項目は、児童３人について、ねがいが達成されていたかという視点で記入する。記入は、以下の３点及び全体で気づいたことについて記述する。

ア　授業の流れについて

イ　場の設定・道具や補助具について

ウ　教師の支援について（声がけ、手助けなど）

ii　授業者による反省

本時の授業において、児童３人への「ねがい」が達成されていたか参観者と同じ項目で、授業者自身が反省をする。

③保護者へのアンケート

対象授業実施期間の児童の様子や週日課表変更に関する意見などを記入する。

アンケート項目は、以下の５点とする。

ア　４月から学校生活を変えたことに対しての感想。

イ　単元期間中に家庭での児童の生活の様子で変化があったこと。

（４）結果の考察

前節で示した授業研究の結果に基づいて、対象授業において、子ども主体の活動がどのように実現しているかを、特に第１次単元の成果と課題に即して検討する。

戸来・名古屋（２００９）の結果から、本研究では第１次単元における課題を、以下のように整理した。

①授業の流れについて

- 焚きつけがスムーズに行かず活動が滞った。
- 焼きの時間に待ちがある。

②場の設定・道具や補助具について

- 活動の場に、互いに背を向けてしまう設定になっているところがあった。
- 薪が湿っていたり、かまどに空気が入りにくかったりして、焚きつけに時間がかかった。
- カップケーキ型やボールなど不安定な道具があった。

③教師の支援について

- 共に活動することに努めたが、どうしても手助けの場面があった。

３　結果

（１）授業者による毎回の授業記録のまとめ

①とおるさん

ｉ　主な活動

- 主な活動はカップケーキ作りだった。後半カップケーキにチョコチップを混ぜた。
- 焼きながら、小枝を折り、くべる。

- 食べ終わったら片づけをして教室まで運んで洗う。

ii　活動の様子

- 材料を計量するところが大雑把になりがちだったので､朝のうちに教師と一緒に計量した。混ぜるところやカップに配るところはスムーズに行っていた。チョコチップを作る活動は好んでやっていた。
- カップを載せた網をかまどまで運んだり、小枝を折ってくべたりした。また、きりたんぽに味噌を付けたり、ねぎを切ったりということも行った。
- 洗い物が入っている担当のバケツを教室まで運び、流しで洗った。

iii　支援の手立て

- 取り扱いやすいように硬いカップを準備する。また、かき混ぜるときに不安定ならないようにガムテープでボールと机を固定する。
- 一つのかまどをカップケーキ用として、枝を折ったりくべたりするように声がけをしたり一緒に行ったりする。

iv　手立ての反省

- カップケーキは慣れた活動だったので、より美味しいものを作るためチョコチップを加えた。麺棒でチョコを砕く活動を好んで行ったし、味も一層美味しくなった。
- 枝折りや薪をくべたりすることは教師が一緒に行うことで作業が進むようになった。慣れてくると一人でも自分から活動していた。

②ゆうこさん

i　主な活動

- だまことときりたんぽの生地を作る。（日程の前半はだまこのみ）
- 生地をだまことときりたんぽにして煮たり、焼いたりする。
- ねぎを切る。

ii　活動の様子

- 麺棒でご飯をつくのは、5分×2回をタイマーセットし自分から行っていた。
- だまこは、始め握りが弱かったが声をかけることで強くにぎるようになった。きりたんぽを焼いて味噌をつける作業はとおるさんに声をかけながら二人で行っていた。
- 手際よく安全にねぎを切っていた。

iii　支援の手立て

- ５分×２回のタイマーを目安にご飯をつく。
- だまこは「ボールの形」とし、慣れるまでは教師と一緒に作る。また、「ぎゅっと、握ろう」と声をかける。きりたんぽの焼け具合は時々、教師が声がけをするようにする。
- ねぎを切るときは「猫の手」と声をかける。

iv　手立ての反省

- だまこが崩れやすかったが、にぎりの弱さよりも火加減などが大きく関わっていたのでできるだけ強くにぎって火加減に気をつけることで崩れることが少なくなってきた。
- すべての活動をほぼ一人で行うようになり自信をもって活動していた。

③かずやさん

i　主な活動

- 薪を焚きつけて、くべる。
- 薪の運搬や小枝折りをする。
- 鍋の様子を見て煮えたか確認する。

ii　活動の様子

- 牛乳パックや新聞紙を使い､焚きつけをした。火はスムーズに点くことが多かった。薪が燃えやすくどんどんくべたが、火が強くなりすぎることが多かった。そのため、網より炎が出たら薪をずらすことにしたが加減を見るのは教師も一緒に行い、慣れてきてから一人で行うようにした。
- 教師の声がけにより、薪を燃やす活動から小枝折りに移ることが多かった。
- 教師の声がけにより、鍋の様子を見ていたが慣れくると自分からふたを取って見ることも多くなった。

iii　支援の手立て

- 火がつきやすいように乾燥した薪を使う。
- 火が燃えやすいようにかまどを底上げする。
- 火が燃え過ぎたときは、底上げした下の部分

に薪を移動するように声をかける。

- 鍋がグツグツしてきたときを煮えた目安として声をかける。

iv　手立ての反省

- 薪が完全に乾燥していたために焚きつけがしやすく、薪を燃やしやすかったために活動がスムーズだった。ただ、燃やしすぎてしまうことがあった。
- 薪の様子を見たり、鍋の様子を見たりと様子を見る活動だったため、教師の声がけや教師に尋ねることが多かった。

④授業全体

i　主な活動

- ３人の担当は、かまど係、だまこ・きりたんぽ係、カップケーキ係とし、教師は鍋係を担当する。
- 自分のものは自分で準備して、片付けは洗い物がスムーズにできるように担当を決めてそのものを片付ける。
- 会食はみんなでそろって行う。

ii　活動の様子

- それぞれの担当の仕事を始めから終わりまで行った。自分の仕事に自分から取り組んでいた。
- 自分のものを専用かごに準備して移動した。片付けは担当のもを片付けたり、持ち物が多い友だちに手伝っていたりした。
- みんなでそろって「いただきます」をして落ちついて会食をした。味について話したり、キャンプについて相談したりしながら食べた。

iii　支援の手立て

- 前回の活動のときの支援で不十分だったカップケーキの型やボールを固定すること、乾燥した薪を使うことなどに配慮する。
- 洗い物は教師や高学年が汚れの落ちにくいものを担当する。洗う作業にスムーズに移るために使ったものを入れるバケツに道具の名前を明記しておく。
- 出来具合について聞いたり、キャンプでどんなことをするか聞いたりして会食を盛り上げる。

iv　手立ての反省

- 個々の活動は、３名ともに自分から活動していた。かずやさんは加減を見る活動が多かったので教師の声がけが多かった。
- 準備や片付けは、３名ともにスムーズに行っていた。
- 会食は、そろって「いただきます」ができたので落ち着いて食事ができた。話題は必ずキャンプのことになり楽しみを共有することができた。

（２）授業研究会の実施

①参観者へのアンケート

i　参観期日

単元15日目。

ii　参観時間

９：25から11：20までの間で都合のつく時間。

iii　参観人数

17人。

iv　参観者

近隣校の特別支援学級担任及び校内の通常学級教員。

v　アンケート回収枚数

13枚（回収率76.5％）

vi　アンケート項目と結果

【設問】「ねがい」が達成されていたか３点（ア授業の流れについて、イ場の設定・道具や補助具について、ウ教師の支援について）について感想をお願いします。

＜とおるさん＞

ア　授業の流れについて

- いろいろな作業に挑戦しているのは、すごいと思った。また、いろんな経験を広げる上でよかったと思う。表情からも楽しんでいる様子が伝わった。
- 小２とはいえ、自分の役割を分かって活動していた。
- 長い活動時間だったが（時々、一休みして脚立にいることもあったが）、道具を自分で準

備していたり、楽しそうに活動していた。
- 自分の仕事内容を理解し行動に移すことができていると思った。鍋の中に食材を入れる場面では、とても生き生きとして楽しんでいる様子が感じられた。
- 一人でカップケーキ作りだけでなく、火を入れたりきりたんぽ鍋の材料を入れ「次はこれだね。」と見通しがもてていることにびっくりした。繰り返し活動の効果と思えた。
- 自分の分担を楽しそうに表情よく動いていた。
- 流れを理解しているようで、教師の声がけや手助けがなくても次の動きに自然と移っていたように感じた。
- 終始楽しそうに生き生きと活動に参加していたのがよかった。見通しを持って次の活動に取り組む様子が見られた。新しい活動がさらに意欲を高めていたようだ。
- にこにこしながらチョコを砕いていた。網から火が出すぎていることを教師に言っていた。周りの子どもの仕事にも目が向いていることを感じた。

イ　場の設定、道具や補助具について
- 何回かやってきて、その都度、改善点があったと見えて使いこなしていた感じがした。
- 手慣れた感があって、びっくりした。
- かまどとかまどの間をすり抜けて移動していて少しヒヤッとした。何を準備したらよいかよくわかっていた。
- 長ネギを一生懸命切っている姿が印象的だった。ナイフの使い方が慎重で安心して見ていられた。
- 自分のボールにカラーシールが貼ってあったり、洗い物のバケツが決まっていたりしているのがよかった。
- 道具を上手に使いチョコを砕いていた。
- 懸命にチョコを砕いていた。下に布巾を敷いているのがよかった。すりこ木の使い方についてのアドバイスに素直に従っていた。
- アルミのカップと違って丈夫なカップを使用していた。

ウ　教師の支援について
- 具体的（わかりやすい）な言葉がけで、的確に伝わっていたと思う。
- 一人分の量（カップケーキ）が明確にわかる方法はないものか。私もいつも結局、助けてしまう。
- 基本的には一人で活動していたが、必要に応じて支援がさりげなくて自然だった。
- 指摘する内容やタイミングなどすばらしいと思った。
- 教師の目配り、気配りで活動に最後までしっかり取り組めたのではないかと思う。
- 軍手をはめるように適切に声をかけていた。

＜ゆうこさん＞

ア　授業の流れについて
- 黙々とやっていたが、手を抜かず、きちっとやろうとする態度が感じられた。丁寧にやってもらいたいところを女の子のゆうこさんにしっかりやってもらったのは、よかったと思う。
- 自分の活動内容がしっかり分かっていて、集中して最後まで活動をしていて感心した。
- 黙々と仕事をこなしている姿が印象的だった。割り当てられた仕事はきちんとこなしているように見えた。
- 黙々と活動していた。
- 慣れた様子で時間をかけて行っていた。
- ご飯のないことに気づいて教師に言っていた。自分の仕事を理解していると思った。
- いつもの流れ通り、黙々とスムーズに作業していた。使った後のスプーンや混ぜ棒もきれいだった。
- とおるさんやかずやさんに自分から声をかけて主体的に作業に取り組むところがよかった。手慣れた手つきで大変上手にきりたんぽを作っていた。成長を感じた。
- 前回よりしっかりつぶそうとする姿、両手にしっかり水をつける姿がみられた。次の声がけを待たずに片付けながら進めているところに驚いた。

イ　場の設定、道具や補助具について

- 作業場のスペースや安定性はやや不十分かな？と思った。外の限られたところでは仕方ないのだろう。
- 必要なものを次々と出して活動をしていた。（片付けも）
- きりたんぽや団子作りに慣れている。
- 使い終えた道具をどのバケツに入れておくか明示してあるので、ゆうこさんは片付けながら次の作業へ進めやすいように思った。
- おたまを持って、しょう油をまんべんなく回して入れていたことに感心した。
- スプーンやボールにシールを貼り、分かりやすいように工夫されていた。
- タイマーは分かりやすくてよかった。

ウ　教師の支援について

- 特に支援の必要はいらないようだったが、誉めの言葉をもう少し与えてもよかったと感じた。
- よかったと思う。
- 適切だったと思う。
- ほとんど支援が必要なくらいだったが、きりたんぽを入れるタイミング等適宜声がけされていてよかった。

＜かずやさん＞

ア　授業の流れについて

- 「自分はできる」という思いが感じられ、的確に扱えていた。表情も実に楽しそうだった。
- 自分の仕事に責任を持ってやっている、という感じがした。確認したり判断したり、頑張っていた。
- 鼻歌交じりに作業をしながらも、教師の指示に耳を傾け行動に移す姿勢に驚いた。楽しみながら活動している様子が感じられた。
- 火加減、小枝折り、鍋の様子を見るなど活動が広かった。
- 火を怖がらず、どんどん焚きつけていた。
- 前回はかまどから枝がはみ出てもそのままだったが、今回ははみ出さない長さに枝を折ること、はみ出たら奥へ入れることができるようになっていたと思う。
- 歌いながら作業をしていて気持ちが弾んでいた。
- かまど係が大分板についてきたようで、火加減を調節しながら楽しそうに活動に参加していたのがよかった。
- 火の様子を見ながら熱心に火の番をしていた。
- 火の焚きつけがとても上手だった。全く怖がることなく慣れた手つきだった。教師にお湯が沸いているか見るように頼まれると、きちんと風上へ行き鍋のふたを開けるなど、安全に留意する点が身についていた。

イ　場の設定、道具や補助具について

- 二つのかまどを扱うのは大変なことだが、これまでの経験からしっかり自分の活動として受け入れていた。やりがいも2倍になったと思われる。
- 薪を入れるときとふたを開けるときにきちんと位置を考えて活動をしていた。
- 底上げ、薪の乾燥などからよく燃えていた。
- お湯が沸いたかどうか見るときにかまどの後ろからちゃんと見ていた。
- 安全に配慮したかまどの位置や道具が準備されていてよかった。

ウ　教師の支援について

- 自分の目でも大体判断できていたが、教師の的確な支援（声がけ）でさらに安定した活動につながっていた。
- 支援の場面が多い児童だと思うが、教師の声がけや手助けは的確であり、見事だと思った。
- 声がけがないと一人で歩くことも見られたが声がけで仕事ができていた。
- 薪をどんどんくべていたが薪をしゃがんで入れるように支援したい。
- 仕事が円滑に進むような声がけ、安全に配慮した手助け等適切にされていた。
- 「手袋は？」と細かい変化に気づき声がけされていた。
- 適切でかずやさんもそれに応じていた。

【設問】気付いたことがありましたら感想をお願

いします。

- 二人で一緒に活動する場面があってよかった。１回だけでなく、何回もやることのよさが示された授業で参考になった。３人を見るのは（みな違う活動）大変だと思った。具体的な分かりやすい表現の言葉をかけてあげることが大事だとわかった。
- 教師と子どもたちの関係がしっかりしていたためか、安心して参観した。子どもたちがそれぞれ自分の役割を理解し、精一杯取り組む姿が随所に見られた。支援案にある「単元におけるねがい」については概ね達成できたと思う。
- 生活単元学習の流れが大変よくわかって勉強になった（支援案）。本時は外は寒かったのではないか（家庭科室でもよかったのではないか。）。分担せずに一つ一つ３人で行っていってもおもしろかったのではないか。３人ともきりたんぽを作りたいし、お菓子も作りたいし、かまどもやってみたい、と思っているのではないかと感じた。
- 自分の活動の流れがわかっていたので教師に余裕があった。教師の支援が自然でタイムリーだった。
- 確実な力が子どもについているのが見えた。継続することや活動を絞り込むことの大切さを感じた。
- 生活に根ざした活動を繰り返し組んだことにより自然と力がつき生活が豊かになっていることがわかった。細やかな場の設定や支援が子どもたちの活動を確かなものにしていることがわかった。
- 仕事に慣れること、繰り返しの大切さ、楽しい活動など生活単元のポイントを教えてくれる授業だった。
- 一つ一つ工夫されていた。何度も今までやってきたことで子どもたちは自信をもって作業しているようだった。
- 晴天の中で活動ができたのが子どもたちにとって何よりだった。このような野外でのダイナミックな体験活動はこれからの子どもたちの生活力をつける上で役立つことだと思う。
- よい授業の条件に事前の準備がされているかということが大きいと言える。
- 二つのかまど、チョコ砕き、鍋、レベルアップしているがこれまでの経験から得た自信もあってか、それぞれが精一杯取り組めるようになったと感じた。特にとおるさんの姿勢には驚いた。一つ一つの活動がその次のどんな活動に結びついて、やがてはみんなとの楽しい食事につながるということがしっかり見通せているように感じた。

②授業者による反省

＜とおるさん＞

ア　授業の流れについて

- 分量を教師とともに朝のうちに計っておいたので、活動がスムーズに流れてカップケーキもおいしくできた。
- 後半､カップケーキにチョコチップを加えた。チョコチップを作る活動を好んで行っていたし、仕上がりもさらにおいしくなった。
- カップケーキ用のかまどに小枝を入れたり、様子を見たりすることを自分から行っていた。
- 当初計画になかったねぎを切ったり、きりたんぽに味噌をつけたりという活動を自分からやりたいと言い、続けて行った。
- 料理完成まであと数分というところで興味が他に移ってきた。

イ　場の設定、道具や補助具について

- 硬いカップだったために安定していて、持ち運びも安心してできた。
- ボールからカップに生地を入れる活動を一人でできる手立てを組むことができなかった。
- ゆうこさんと並んで活動できる場はお互いの様子が見ることができた。

ウ　教師の支援について

- カップに油を塗ったり、生地を分けたり、枝を折ったりなどは教師とともに行うことで、活動に注目して進めることができた。

• 一人で活動することが増え、声がけや見守ることでどんどん活動をしていった。

＜ゆうこさん＞

ア　授業の流れについて

• 分量を事前に計ることにより活動の流れがスムーズだった。
• 準備から片付けまで、ほとんど一人で活動していた。
• だまこやきりたんぽ作りは手際よく黙々とやっていた。

イ　場の設定、道具や補助具について

• 調理活動のとき使いたいものがすぐに取れる位置になかったので、テーブルの上を整理する必要がある。
• 調理のする位置をとおるさんの隣にしたことでお互いの様子が見えるようになった。

ウ　教師の支援について

• 事前に材料を一緒に計ることで活動中のゆとりと自信につながっていった。
• 一人で活動できることがほとんどで、時折、声をかけて励ましたが、全体的に声がけが少なかった。

＜かずやさん＞

ア　授業の流れについて

• 準備や片付けは、自分から行われていた。
• 焚きつけや薪入れはスムーズでどんどん燃やしていた。
• 教師の声がけにより鍋が煮えたかどうか度々確認して伝えた。
• かまどが二つになったが、焚きつけや薪入れは、自分からスムーズに行っていた。

イ　場の設定、道具や補助具について

• 空気が入りやすいようにかまどの底上げをしたので、よく燃えた。
• 乾燥した薪だったので、よく燃えた。
• 小枝や薪の置き場所を決めることで場が整理される。
• 座って薪の番ができるとよい。
• 水場を近くにする必要がある。

ウ　教師の支援について

• 火が燃えすぎるときにどのようにするが具体的に支援する必要がある。
• 鍋が煮えたときに自分で判断できるように支援する必要がある。
• 火の様子、鍋の様子、どちらも様子を見て活動を進める担当だったので、教師の声がけが多かった。

（３）保護者へのアンケート

①実施期間

研究年度12月。

②対象

対象学級児童の保護者３人。

③アンケート回収枚数

３枚（回収率100％）

④アンケート項目と結果

【設問】４月から学校生活がかわったこと（生活単元学習中心の生活）についてのご意見・ご希望をお願いします。

• 月ごとにいろいろな学習があり、そのことを続けて取り組むことで自信や満足感がもてたと思います。親は希望していたものでしたが、このようなことは学校でやることと思っていませんでした。
• 作業などの活動中心なのは希望していたのでよかったと思います。時々、役割交換があってもいいかも…。

【設問】「学校でキャンプ」の単元中の家庭での様子についてお尋ねします。ご家庭で下のような生活が見られた場合には、〇を付けてください。（いくつでもかまいません。）

• だまこなべやきりたんぽやカップケーキやかまどのことなどが家庭で話題になった。：２人
• 手伝いをするようになった。：０人
• 学校へいつもよりはりきって行っていた。：２人
• キャンプのことを楽しみにしている様子が見られた。（話していた。）：２人
• 一人でやることが増えた。：２人

- たくましくなった。：２人
- 疲れているようだ。：１人
- 怒りっぽくなった。：０人
- 単元のことで愚痴を言っていた。：０人
- 学校に行きたくないと言うようになった。：０人

４　考察

（１）第１次単元との比較に見る対象授業での子ども主体の活動

①成果の継承

授業者による毎回の授業記録、授業研究会での参観アンケート及び授業者による反省には、第１次単元同様、活動の分担、繰り返し、道具等の改善による子ども主体の活動実現過程とその成果を読み取ることができる。これらは第１次単元の成果を継承したものと言える。

②課題の解決

次に、前述した第１次単元で課題とされていた事項に即して検討する。授業者による毎回の授業記録、授業研究会での参観アンケート及び授業者による反省から、以下が指摘できる（以下、「」内は、第１次単元での課題）。

ⅰ　授業の流れについて

「焚きつけがスムーズに行かず活動が滞った」ことについては、かまどの底上げ、薪の十分な乾燥といった場の設定や道具の改善により、解決することができた。

「焼きの時間に待ちがある」ことについては、二つのかまどを用意したり、新たなメニューとしてより集中して火加減等の管理が求められる鍋料理を加えたりして、活動量の増加を図ったことで問題が軽減し、より意欲的な取り組みを実現した。

ⅱ　場の設定・道具や補助具について

「活動の場に、互いに背を向けてしまう設定になっているところがあった」ことについては、お互いの様子が見やすい設定に変えた。そのことで仕事の滞りなどは指摘されず、概ね良好な対応であったと言える。記録から、「楽しそう」といった指摘があるが、場の配置もこのような雰囲気づくりには有効であったと考えられる。

「薪が湿っていたり、かまどに空気が入りにくかったりして、焚きつけに時間がかかった」ことについては、前述の通り、場や道具の改善が功を奏している。

「カップケーキ型やボールなど不安定な道具があった」ことについては、より安定感のある道具に使用を切り替えたことが、成果をあげていることが指摘されている。

ⅲ　教師の支援について

「共に活動することに努めたが、どうしても手助けの場面があった」については、場や道具等の改善により、一人でできる状況が拡大したことに伴い、解消が進んでいる。一方、３人の児童に対して、折々に手助けはなお存在しているが、場を工夫することで教師が大きく動かなくても対応できる等の変化があった。また、教師が共に行うことで、児童の活動もスムーズになり、やがては一人で行えるようになったことも記録されている。

③保護者へのアンケートから

第１次単元同様、保護者へのアンケート結果からも、否定的な評価は見られず、子ども主体の活動が過程においても良い評価を得ていることが伺える。そのような中にあって、本研究で行ったアンケートでの保護者による「時々、役割交換があってもいいかも…」という意見は重要であろう。この意見は、授業に対する批判的な意見ともとることができるが、その内容は、授業改善に対する建設的な一提案である。授業に対して、このような踏み込んだ意見を得られたことは、第１次単元からの継続した保護者への働きかけが、共同実践者としての保護者の関心を喚起したことを示唆している。子どもや教師だけでなく、保護者とも実践を共有することは、建設的な授業改善の上で有用であると考えられる。

（２）総合考察

以上のように、本研究から、単元実践による成果と課題が、続く新たな単元での授業改善の重要な情報として機能することが示された。戸来・名古屋（２００９）では、１単元内での授業改善過

程が示されたが、本研究では、単元間においても成果と課題を継承しながら実践することで、１単元だけではなしえない、より高度の子ども主体の活動を実現できることを示し得たと考える。

このような実践の積み上げは、現場の授業づくりではごくごく当たり前のこと、授業づくりの基本であろう。今一度、授業づくりの基本に立ち返っての実践が望まれる。とりわけ、「子ども主体の生活」は、日々実現し、充実していくことが不可欠である。本研究で示したように、実践の蓄積の上に、さらなる成果を蓄積していくことがいっそう求められよう。

【謝辞】本研究にご協力くださいました、とおるさん、ゆうこさん、かずやさん、そして保護者の皆様、Ａ小学校教職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

【文献】

戸来キイ子・名古屋恒彦（２００６）：領域･教科を合わせた指導を大きく位置づける小学校特殊学級における教育課程編成の課題．日本発達障害学会第41回研究大会発表論文集，p. 36.

戸来キイ子（２００７）：小学校知的障害特殊学級における教育課程の編成の在り方に関する研究．岩手大学大学院教育学研究科修士論文.

戸来キイ子・名古屋恒彦（２００９）：生活単元学習を大きく位置づけた教育課程・実践の意義に関する検討―小学校知的障害特別支援学級における学校生活づくりを通して―．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第８号，pp. 173－188.

表１　週日課表

	月	火	水	木	金
8:15	登　校				
8:30	係の仕事 全校朝会 児童朝会				
9:00	おはようタイム				
9:30	生活単元 （業間休みを含む）				
11:20					
11:30	図工	音楽	音楽	音楽	体育
12:00					
	給食 昼休み				
13:25	掃除				
13:45	国算	国算	国算	国算	国算
14:30					
14:35		クラブ	書写		委員会
15:25					
	帰りの準備・帰りの会 下校				

表２　児童の様子、ねがい、手立て

名前	様　子	ね　が　い	手　立　て
とおるさん（２年）	○ホットケーキミックスを計り、水と混ぜてカップケーキ型に入れている。 ○焼ける様子を見たり、作ったものをおいしく食べたりして、野外調理を楽しんでいる。	○ホットケーキミックスと水を適量混ぜて、カップケーキ型に入れてほしい。 ○カップケーキ型をかまどまで持っていってほしい。 ○焼けるまでの間、教師と一緒に続けて活動に取り組んでほしい。	○必要な量がちょうど１杯分になる計量容器を用意する。 ○カップケーキ型は安定感のあるものを用意する。 ○意欲的に取り組めるように、様子を見て「良いにおいだね。」「焼けたかな。」などと声をかけて励ます。 ○待ち時間が少なくなるように焼き網を工夫する
ゆうこさん（５年）	○米のつぶし方がやや弱いが、タイマーを目安にご飯と片栗粉と水を混ぜてつぶしている。 ○小さいだまことき りたんぽを一人で作ってい付けを考えたりしている。 ○味見をしたり、友だちに「おいしい？」と感想を聞いたりして野外調理を楽しんでいる。	○すりこ木でごはんと片栗粉を混ぜながら米を半分くらいつぶしてほしい。 ○だまこを手のひらで丸めてたくさん作ってほしい。 ○「校内キャンプ」を楽しみにして、意欲的に活動に取り組んでほしい。	○目安としてタイマーを５分間にセットして始める。 ○だまこを丸めるときに左手に水をつけて調理しやすいようにする。 ○意欲的に取り組めるように、様子を見ながら、「今日の○○よかったね。明日もおいしいの作ろうね」などと声をかける。
かずやさん（６年）	○牛乳パックと新聞紙と小枝で手際よく焚きつけをしている。 ○空いた時間を見つけて小枝を折っている。 ○自分から、焚きつけ、小枝折りなどの仕事に取り組んでいる。	○焚きつけを手際よく進めてほしい。 ○どんどん薪をくべてほしい。 ○なるべくたくさん小枝を折ってほしい。 ○会食や「校内キャンプ」を楽しみにして、継続して仕事に取り組んでほしい。	○始めに新聞紙に火をつけ全体に広がるようにする。 ○燃え具合をみてペースをつくれるように、何本か入れたら、「燃え具合はどうですか」と声をかける。 ○どんどん折れるように多めに小枝を準備しておく。 ○仕事がスムーズに進められるように「○○がんばろうね」「○○うまくできたね」などと励ましの声をかける。